

(講評)

ルサンチカ『楽屋』

多くの役者たちがこの楽屋にいた、(今もいる) ことを想像させる、たくさんの服を吊るした美術とそれを美しく見せる(空間構成) オープニングの空間演出は印象的でした。広い舞台をまともによく見せる演出や、装置の配置も成功していたと思います。

そしてまず、この戯曲に真っ向から取り組もうとした、若い皆さんの意欲に敬意を表します。作品には若者らしい「熱」があふれていて、好感が持てました。

本来女性が演じる役を男性が演じたことは、若い役者が「台本に指定された役の年齢が醸し出すリアリティー」を乗り越えるため?などと想像しながら拝見しましたが、原作の持つ「楽屋に渦巻く女優の怨念」のような重たさを和らげ、むしろ見る者に距離をとらせて、コミカルにすら感じさせていました。

演技や演出をよく勉強されているように見受けられ、既存の舞台常識にとられない自由な演出はよかったと思います。ただ、全体的な印象としては、この戯曲の世界が演出家のふに落ちていないのではないかと感じました。演出家なりこの作品を選んだ人が、この戯曲の本質的なところに魅力を感じてこの作品に取り組まれたのかが、私には今ひとつピンとこなかったのです。台本の中で扱われる「かもめ」の名台詞も、そのセリフの持つ真意が、演出や役者の想像の域を出ていないような、質感の伴わない「ことば」に感じられ、後半の「主よ～よるべなきさすらいびとを～」のようないくつかのセリフにも「無理」を感じました。そのあたりが成立していれば、芝居の印象は変わっていたように思います。印象を左右するということでは、音楽の使い方も、戯曲の本質に迫るために効果的に使われたかという点では、工夫の余地を感じました。後半になると演技に飽きてしまったのは、演技技術の未熟さにも起因すると思いますが、戯曲理解と芝居の流れを作る演出の技量もあるのではないかと感じました。単に稽古時間を十分とることができなかつたのかもしれませんが。

しかしながら、こうしたいくつかの問題点は年齢と経験を重ねるうちに克服できるものしょうから、まずは若い人が「等身大の演劇」を抜け出そうと挑戦する、こうした取り組みを高く評価したいと思います。

杉山準

ルサンチカ「楽屋」(2015.2.15)

幕が開くと間口いっぱいの長い机。そして、さらに幕が左右に開くと圧巻！服・服・服！ 圧倒されました。照明がうしろからあたって、所々にある赤い服が眼を引き、素晴らしい装置でした。

「楽屋」は、女性4名で演じる「女優」を描いた芝居です。何故今回、男性二人に女性役をさせたのでしょうか？ まず、そこが疑問でした。終演後見たチラシには「舞台に囚われた男でも女でもない4人の「女優」たちを通して人間の存在意義を問う」とありましたが、男性が女性役を演じているとしか見えず、「女優」という言葉が出てくるたびに、やはり違和感を感じました。

ここは楽屋で、机の前、すなわち、観客側に鏡があるということが分かるには分かるのですが、手元で化粧していることが多く、もったいないです。後々、鏡に写っている相手を見ての会話も出てくるし、観客に初めにもっとしっかりと認識させておくことが大事だと思います。

戯曲「かもめ」の台詞の稽古をしているらしい出番前の主演女優が真ん中にいて、両端に二人。舞台を大きく使っているのはいいのですが、観客の視線は中央の彼女にのみ行きがちです。三人の関係をわからせるためには端の二人のリアクションが重要ですが、動きも入れているし移動もしているのですが、あまり効果的ではなかったように思いました。

女優だったがプロンプターで終わってしまった二人は、生きてきた時代が違うのに、その時代の差があまり感じられませんでした。日常生活でもよくあるジェネレーションギャップは、共感を持てるものです。二人のギャップ感が面白く出せると、ぐっと芝居の中に入っていったのに、と残念に思います。

随所にいろんな芝居の「台詞」が出てきますが、そのそれぞれの「芝居」の差も感じられませんでした。この芝居は「女優」であることが大事です。いろいろな芝居のいろいろな役を演じる女優。それを観客に感じてもらわねばなりません。やっている役者が気持ちいいだけではそれは伝わらないのです。

一番最後に登場する彼女は病的な感じをうまく出していました。小道具の枕もいい感じでしたね。しかし、彼女の登場で話が転がり出すのですが、無駄に椅子にぶつかることが多く、少し気になりました。もっと計算して動いたほうがよいと思います。

そしてラスト。執念のようなものを描き出したいがためのあの叫びなのでしょう

うか？ まさに「三人姉妹」の芝居のごとく、現実は厳しいけれども希望を持って向かっていこうとする、清々しささえ感じるラストが良いと思うのですが（まあ、これは好みでしょうが）、三人がバラバラに客席に降りて行き叫ぶという演出は、舞台と客席の壁を取り払ったようには思えませんし、趣旨は観客には伝わらなかったように思いました。

猫会議 飛鳥井かづり